

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第87号（2013年8月）

風に吹かれて（65）

白井啓治

『異常も裏から見れば正常だと風の言う』

異常気象、異常気象とあちこちで言われる。しかし、「異常を裏側から見れば、こうなる事は当然でしょう。異常ではないですよ。こうなることが正常です」という返事がかえってくるようである。

CO₂を大量排出すれば、地球が温暖化するのは分かっていることだし、温暖化すれば気流だって変化するだろう。偏西風が今までと違った動きをしても、それは異常な動きではなく正常な動きなのである。地球そのものもマグマを持った活動体なのだからどこで地震が起こっても正常である。

地球上に起こる現象のすべては、自然科学や物理化学の法則等に基づいての事、原理原則にかかった結果である。

地球に起こっている自然現象の全ては、正常な結果としての現象である。随分以前であるが、気象学者の話として、異常気象とは言うが地球全体としてみれば異常気象でもなんでもない、という記事を読んだことがあった。ゲリラ豪雨のニュースを聞いて、その言葉を思い出してしまった。そして、異常も裏側からそれを観れば、全く正常なことだと改めて気づかされた。狭いスポットで豪

雨が降れば、広い範囲での干ばつがある。こんなに雨が降っていると思っても、利根川水系のダムは干上がっているのだから。

改めて言えば、打田兄が今挑戦しておられる「昇三の新釈平家物語」の原稿を整理しながら、どう触発されたのか、本棚から「古事記」を引っ張り出すことになってしまった。で、改めて読んでみようという気分になったのであるが、我が本棚にある「古事記」は、いわゆる和銅奏覧本（太安万侶本）を復元することに務めたという本で、読むのに実に手間がかかる。それで本屋に行って、何か分かり易く古事記を解説する本はないかと思ってきた。

文庫本で『眠れないほど面白い古事記』というのが出ていたので早速買ってきて読み始めた。その本は副題に「愛と野望、エロスが渦巻く壮大な物語」となっているのであるが、古事記は正にその通りの内容である。

伊耶那美の命（イザナミノミコト）、伊耶那岐の命（イザナノミコト）が地上につかわされて国づくりが始まるのであるが、それは正に愛と欲望、エロスの渦巻く物語である。

ところで二冊の古事記を見ていて不思議に思ったのであるが、日本の神々たちの名前はなんて面

倒で覚えにくい名前なのかと思ってしまった。しかも当てられている漢字は、漢字の意味を考えてはいけないうである。日本語でありながら、実に発音しにくい言葉である。どうも日本語とは言えないのではないかとさえ思ってしまう。

古事記を読みながら、そんな事を思っていたら、縄文語を研究されている鈴木健兄から郵便が届いた。鈴木兄の「日本語になった縄文語」の研究論文が、国際縄文学協会誌「縄文」に8回にわたって掲載されることとなったとのことであった。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

私が石岡市の伝説を題材にした物語を書く切っ掛けを頂いたのが、鈴木健兄の著書「常陸国風土記と古代地名」であった。

何気なく本屋でみて購入したのであったが、そこには小生の作家としての創作欲を触発するものが大きくあり、その触発で書いたのが「新説柏原池物語」であった。そして、この物語を書き起こしたことで、当ふるさと風の会の前進であったふるさとルネサンス立ち上げのお手伝いに参加することとなったのである。

鈴木健兄の著書に出会わなければ、伝説等をモチーフとしたふるさと物語を書く事もなかったであろうし、ふるさとルネサンス講座の講師を引き受ける事もなかったし、この風の会の発足もなかったと言える。

さらには、小林幸枝という舞台表現者としての優れた才能を持った聾者の女性に会う事もなかった。当然、小林に会わなかったらこの十月二十三日(二十五日)に行われる「ホルストの日本組曲を主題とする朗読舞劇・平将門伝説・荳蔻姫物語」の東京公演もなかったと言える。

鈴木兄には、実に不思議な縁を頂いたものかと、その不思議な縁を愉快に思い、大切にしていきたいと思っている。

兄の国際縄文学協会誌「縄文」(年一回発行)に掲載される「日本語になった縄文語」は8回、通年8年間にわたつてとなるが、実に嬉しい掲載である。論文は、読んで面白いというものではないが、そこに内包されている物語力、物語を創造させる力は凄いものがある。兄からの便りは、小生にとっても風の会にとっても実に嬉しく、久しぶりの愉快を感じさせて頂いた便りであった。

文明の暴走(3)

菅原茂美

文明の暴走(1)では、そもそも文明を生み出した人類の出現について触れた。(2)では暴走の現場で、原発事故や交通機関の個々の限局的事故も害は大きい、後で重大な事態に発展する地球温暖化や、環境汚染・公害の方が、全生物の存亡に関わる、より罪深い暴走だと指摘した。(3)の本号では、そのような文明の暴走に世界は、いい加減この辺で目を覚まし、しつかり歯止めをかけるべきだと、主張したい。

* * *

現在世界人口は70億人。毎年8500万人ずつ増えている。(しかしこの現実の裏には、貧困のため5歳まで生きられない子供は700万人もいる)。人類は、向こう見ずの過剰繁殖。食糧確保など、生存のための技術開発が十分でなかった時代は、人口増加率は、それほど高くはなかった。出生と死亡のバランスが保たれていた。

しかし、40万年前の火起こし術の獲得など、文明発達の基礎ができてからは、状況はかなり急変した。石器から土器・鉄器へと道具も進化し、食糧をより安全にキープでき、生存環境が一段と改良されると、人口は急に増え始めた。

それでも、地球上に余裕があるうちは、未来に對し、それほど悲観論も湧き起こらない。が、今日のように、日本など一部の国を除き、確実に人口は増え続け、世界中、ぎゅうぎゅう押し合い・へしあい。地球が1・4個なければ収容できない現況だ。そのため、近隣同士は領土問題など、野生の縄張り根性が露出し、争いが絶えない。

縄文時代の日本人口は10万人と言われる。現在

の千分の一である。これなら境界線がどうの：と争いなど起きようがない。

それがアジアでは、大陸で人口増加が激しく、頻繁に内乱が勃発。戦争難民が「弥生人」として極東の島国に、大挙100万人も一気に押し寄せてきた。そしてこの列島で敗者復活戦ながらの権力闘争を繰り返し、穏やかな先住民(縄文人・蝦夷などを虐げ、大和朝廷とやらが君臨する。おそらく世界中こんな状況で、弱肉強食の侵略競争が満開。急激に人口は増加していった。

それゆえ世界の「諸悪の根源は人口過剰」にある：と私は言いたい。なぜ人類は進化の過程で、「人口抑制の仕組み」を生み出せなかったのか？肝心の事ができず、何のために大脳をこんなにも膨らましたのか？

動物行動学の調査報告によると、カナダの森林狼や、アフリカのリカオン(ともにネコ目イヌ科)は、自分達のテリトリー内で、獲物の数が減少してくると、厳しく繁殖制限が行われる。即ち、♂の序列1位と♀の序列1位が「番い(つがい)」を形成して子を産むだけ。他は番いを形成しないのみか、交尾さえ行わない。種の保存のため、最低限度の子孫しか残さない。獲物が不足しても、群れ全体で少数の子供を大事に育てる。いかに食物連鎖の頂点にいるとはいえ、人知の及ばない「節理」がしっかりと機能している。

人類は万物の霊長とか言って威張っているが、食糧があるうが無かるうが、むやみやたら子供を産み過ぎる。挙句の果ては、人口過剰となり、略奪や侵略の繰り返し。知性も理性もありやしない。狼の爪の垢でも煎じて飲ましてやりたい。

私の言い方に対して、暴言だ！不謹慎だ！と仰

るなら、人間が他の動物より優れている点を列挙してもらいたい。少なくとも肉体構造（細胞）は、豚やチンパンジーと殆ど変らない。運動機能はのろま。五官はまるでダメ。築いた文明はチグハグ。ヒトの遺伝子2万5千個のみでは生きられず、乳酸菌など千種の共生菌が持つ330万個の遺伝子の協力がなければ生存できない。

DNAもほんのわずかの違いしかない。比較解剖学・比較生理学、殆ど同じ。ただちよつとだけ、体重に対する脳重比が、ヒトはやや大きいだけ。ならば、その膨らんだ脳味噌で、どれだけの成果を挙げたかという、前回まで述べたように、かなり「ずぼら」で独善。子孫が安心して住めない環境を残しただけ。他の生物を、絶滅の危機に追いやるなど、『子孫を残したい』とする全生物に共通したDNAの根本原理を平気で踏みにする。『生物多様性の保全』は、喫緊の課題だ。私は人類の悪口を言つて得意になっているのではない。万物の霊長などといって威張れるほどの「優れ者」ではないと言いたいのだ。

人類は自然の一部に過ぎない。人類だけが他を犠牲にして繁栄すればそれでよいというものではない。おそらくすべての生物は38億年前に誕生した、ただ1個の単細胞生物の子孫である。DNAの分子はすべて共通である。人類の繁栄のみに重点を置いたものの考え方は、偏狭である。

聖（ひじり）もどきが、悟りを開いた様な物言いに聞こえるかもしれないが、人類というこんな狭量で独善の「利己的な種」は、厳しい反省が必要だと言いたいのだ。

自分の権利を主張するなら、他人の権利も平等に認めなければ、片手落ちだ。『何としても子孫を

残したい』それが、全ての生物に共通したDNAの根本原理だ。

そこで私が言いたいのは、人類は必要以上に資源を浪費し、贅沢をして、全ての生物が生存しにくい環境破壊を、この辺でキツパリ、打ち止めにすべきだ……という事。経済至上主義で、何もかも高速・効率主義。それが文明の暴走だ。一人一日2^ド以下で暮らす人口は、世界のほぼ半数に近い。先進国はその50倍ほどの浪費を続けている。資源枯渇・環境汚染・略奪戦争……これは、文明崩壊のお決まりのコース。

それを正すのは、「スローライフ」に徹する事。頑張り過ぎず、「晴耕雨眠」くらいが丁度良い。南米の「ナマケモノ」こそ、人類生残の立派なお手本。活発な活動を抑えれば、消費するエネルギーも少なくて済む。ナマケモノは、僅かの木の葉を食べ、週に一度排便するだけ。後は木にぶら下がり、鼻提灯で、殆ど昼寝。人類も少しは、ナマケモノを見習うべきだ。そうすれば子孫に彼等が使うべき資源を残してやれる。

『地球は未来人からの預かりもの』この概念を頭にしっかり叩きこむことこそ、人類滅亡からの歯止めと言える。

【人間は単なる動物である。人間の行動を動物行動学的に冷静に観察すると、野生時代、オスは数名の群れで動物を追い、獲物は巣に持ち帰り、メスや子供と平等に分けて食べた。メスは専ら果物・若芽・イモ類などを採集し、子育てに専念。ここで、オスは獲物を豊富に巣に持ち帰れば、メスのお眼がねに叶う。獲物提供の量や質でメスの気を引き、生殖行動を強く要求できる。メスは、サル時代のように、発情期にだけオスを許すので

は、オスにソッポを向かれ、餌にありつけない。そこで人類のメスだけが発情期以外でも（妊娠中できと、いつでもオスを許す行動が身に付く。オスもできるだけ多くの精子を、より多くのメスに配布して子孫を残そうとする。これは全ての生物に共通したコンセプトだ。

多くの精子・即ち細胞分裂の頻度向上と、がん細胞の異常増殖の機構は同じ原理。発情期にしか交尾できない他の動物に比べ、人類は、がんの発生率が異常に高い。チンパンジーのがん発生率は2%ぐらいだが人類は30%を超える。なお、人類発祥地アフリカに留まれば、日照不足からくるヴィ病瘰癧病不足により起こる「（くる病・骨軟化症）」は起きにくい。しかし、人類は緯度の高い地域まで進出したために、ビタミンD不足が、がんにもなりやすく、米国の北部は南部よりがん発生率が高い。

又、睡眠を司るメラトニンというホルモンは、がんの発生を抑制するが、眠るべき夜を寝ないで働く人は、がんの発生率が非常に高い。昼のみ勤務の看護師に比べ夜間勤務が多い看護師の乳がん発生率は2・9倍であった（米国）。このように文明の暴走による不具合は、多岐にわたる。】

さて視点を換え、文明発展のため人間の本能が全うされない不具合も多々見られる。

【**「営巣本能」**。これは殆どの野生動物に備わったものである。夜の「埒（ねぐら）」、或いは「巣」と言ってもよい。外敵から身を守り、安心して眠り、或いは子供を育てる場所。本能的に、そういう場所を造営する本能が、動物には備わっている。大小にかかわらず、誰でも一国一城の主になりたい

のだ。そして自分の育った安全な巣に帰りたいという「**帰巢本能**」も強く働く。人の果てしなき郷愁も、その原理。それが、今日の人類は、都会ではマンション・アパートなど、一律に設計された変哲のない建築物を峙としている。一極集中の愚かさ。

子供が段ボールなどで「小屋」を作り、少し環境に恵まれば、樹上に、ツリーハウスを作る。女の子は、お人形さんの家を作ったりする。そのような創造性が、将来「物づくり」の原点にも発展し得る。それが何もかも既成の建築物で、なんの好奇心も掻き立ててくれない。貧しくともよい。親子が一緒に日曜大工で、物置など作れば、子供の創造性を伸ばしてやれる。経済至上主義が万事を支配し、合理的・効率的に物事が運ばれると、人間に進化が無くなる。思考の停止は発展の停止。空想を失うことは文明の喪失につながる。「仮設」の想起こそ、文化発展の原動力。

* * *

文明暴走の最たるものは、大量破壊兵器の開発競争であろう。私はアメリカという国は、原爆投下や枯葉剤散布など、あまりにも非人道的な行為を平気で実行する超独善主義の国と長年思ってきた。戦争相手が白人国ならこれほどの悪意に満ちた行為は決断しなかったであろう。白人には、根本的に有色人種を差別する病根がある。それゆえ、最先進国と言いながら、ルワンダやボルボトによる大量虐殺を起こした国と、なんら変わらないじやないか。

又、江戸末期、日本近海で米国捕鯨船団が、鯨を獲り放題。遠洋航海なので新鮮な野菜や、水や薪が欲しいために、鎖国日本に開国を迫ってペリ

ーは来航した。鯨資源枯渇の原因者でありながら、やつとそれに気づき、今、捕鯨禁止を世界に強制。ところが日本の調査捕鯨に、シーシェパードなど、猛烈な実力抗議。勝手極まりない国だと思ってきた。更に、米国の余剰農産物を処理するために、日本農業を破壊し、**食糧自給率39%**の惨憺たる国家に追いやってた極悪の国だと思ってきた。食糧輸入に事変があれば国民の6割は死ぬほかないのだ。ところが、そのような非道の米国にも、世界平和へのかすかな「良心」があった事を最近知った。それは旧ソ連崩壊直後、世界から核兵器を減らすうと、ロシアに働きかけ、20年かけて、米国の予算でロシアの核弾頭7616発を廃棄した。勿論相応の自国核弾頭も廃棄した。現在、米国の原発による電力は、その10%はロシアの核弾頭から抜き取ったウランを9000億円で買い取って燃料に使っているのだという。人類を滅亡に追いやる可能性のある大量破壊兵器を、平和利用する智慧が、かの国にもあったのかと、今更、見直した。

【現在・世界各国の核弾頭保有個数】

米国 1654発・ロシア 1480・フランス 300・英国 225・中国 250・インド 110・パキスタン 120・イスラエル 80・北朝鮮 8?

合計9か国が4227発を保有。

*西洋の「**自然を支配する**」という奢りの思想が、このような歪な文明を生み出した。今後人類は謙虚な反省の下に「**自然を崇拜する**」精神にハンドルを切り変えなければ、大きな不安を未来に残す事になる。」

* * *

最後に文明暴走の、何とも滑稽で、哀れなほど悲しき現象。それは、21世紀にもなって、人類は

何もかも知り尽し、これ以上科学の進歩の仕様が無いのでは…と思う、自惚れ状態。私など単細胞だから、21世紀にもなったら、*台風の制御。*「自動車」というのだから、完全自動操縦。*電力の無線送電。*麻薬・カースト・所得格差など、21世紀になったら、当然コントロールできているはずと思っていた。それが全くの当てはずれ。未来予測の超甘さ。

一方、文明の暴走を非難する立場からは、矛盾するようだが、よくどこまで進化を遂げたと、感心な事例も多数。*IPS細胞*MRI・CT*臓器移植*遺伝子解析*クローン家畜*卓上&大型計算機*デジカメ*携帯情報通信機*携帯音響装置*カーナビ*航空機*未完成ながらリニアモーターカー*人工衛星*そして農民の重労働を解放してくれた田植え機と稲刈り機et。

ところが、人類の知恵は、宇宙を知り尽くすどころか、ほとんど何も分かっていない事が、だんだん明らかになってきた。

現在宇宙は、猛烈なスピードで膨張中。それは地球が太陽を回る軌道の半周分(天文単位)ほぼ3億kmの直線を底辺として三角測量すると、遠くの銀河ほど我が銀河から猛烈な速さで遠ざかっていることが分かった。そのエネルギーは何か？それはニュートンやアインシュタインの方程式からは導くことができない。即ち未知の力により引き離されている。「**マイナスの重力**」という概念を導入しなければ説明できない。現在の宇宙は既知の物理学や化学では解釈できない「**暗黒物質**」で満ちている。星や星間物質など、人知で認識できる物質は、全宇宙のわずか5%に過ぎないという。

西洋で自然科学が発達し、人類は自然を征服し

ようと試みたが、それはとんでもない冒険である。自然の脅威を見くびっては、とんだしっぺ返し連続である。自然のなんたるか、そのほとんどが未だ分かっていない。そして人類は万物の霊長などと自認しているが、その実は、とんでもない野蛮性や残忍性を持ち、世界平和の秩序など、絵空事のように儚い。現在の文明は、ハード面・ソフト面ともに、未熟である。

21世紀を迎えたのなら、いい加減この辺で目を覚まし、謙虚な反省の下に、ジックリと明日を見つめる目を持たなければならぬ。汲々セカセカの暴走を止め、30世紀の子孫に嗤われない基礎を今、しっかりと築くべきである。

第七回 いしおか雛巡り

兼平ちえい

シリーズでお伝えしています、石岡のおまつりで華やかさを添える山車の上に乗る人形のご紹介は今回はお休みします。

石岡のおまつりで賑わう石岡市中心市街地は去る二月十六日～三月三日まで、いしおか雛巡りが行われ、九二軒の参加店を中心に市街地は優しさと愛らしさに包まれました。

ふるさとで過ごした遠い日の「ひなまつり」を思い出させるような、とてもなつかしいひなまつり。『ただいま』『おかえりなさい』そう答えてくれる歳を重ねた母や父……。

本当のふるさとに帰ることが叶わなくとも

ここにくれば『ただいま』と言える

あたたかなまち石岡。

おかえりなさい……いしおか

(いしおか雛巡りパンフレットより)

七回目の雛巡りは、歴史の里のひいな遊びと題して、石岡の歴史巡りと雛巡りを同時に楽しんで頂こうという「歴史の里いしおか」に相応しい催しが工夫されました。

先ず常設展示場のひとつ、石岡市まちかど情報センターでは恒例になった歴史絵巻方式の雛飾りを今回は「源氏物語EMAKI二〇一二」と題し、源氏物語五十四帖の主役とそのエピソードを中心に作成されてありました。ひな人形達は主役になりきってまるで物語の主人公達が現代に舞戻ってきたようでした。

作者、紫式部の異母弟の藤原北家藤原惟通(これみち)は、一〇一九年七月、常陸介(国府の長官)に任ぜられましたが翌年一〇二〇年七月三日に任地(国府)で死去したとされ、惟通が没した後、母(式部の継母)と妻子は帰京せずに常陸國国府に住んだとされています。

物語の中では、常陸介として石岡に赴任した父親に同行し幼少期から娘時代を常陸國で過ごした女性が、源氏物語五十四帖、後半宇治十帖の女主人公浮舟として登場し、その浮舟が時の流れを越え石岡に帰ってきました。そして未来へ……。

情報センター内ではパソコンでの解説テープが流れ演じているひな人形と同じ目線で椅子に腰掛け、聞き入りながらの見学に、素晴らしい、お見事、壮観、日本の伝統ひなまつりを町ぐるみで取り組んでおられる方々の熱い思いが伝わりました、物語の詳しい説明をありがとう、解説がよかった、等等沢山の感動が寄せられていました。

また町中のひなさま参加のお店には、お客様の

おもてなしをする、しるしとして源氏香図の紋をデザインした札を掲示し、石岡の町に平安の雅の世界を表現し、札の中の和歌をきっかけにお客様との会話がはずみますことに思いを込めた展示も目に留まりました。

源氏香図とは、香道には和歌や物語文学を主題として数種の香木をたき、香りの違いをきめる「組香」というものがあり、江戸時代に始まった源氏香はその代表的なもので、五種類を五包ずつ、合計二十五本の香りの中からその香りを決めます。五本の縦棒を結ぶ横棒は結ばれた香木が同種の香りだったことを表すもので、その組み合わせを表現する図柄で組み合わせが五十二種類ある事から源氏物語五十四帖になぞられ、桐壺と夢の浮橋以外のそれぞれの巻名をつけ、物語の中の代表的な歌を詠む事により、香の順を答えた事の代わりにするという展開になって行きます。香道のこの香合わせは、源氏香図の紋かるたという絵合わせ、かるたにも使われているそうです。

源氏香に見られるような雅な遊び心をお客様と共有し、まちなか全体につなげて行くという今回の「源氏物語EMAKI二〇一二」は私にとりましても多いに楽しく勉強させて頂きました。

そしてまちなかの雛飾りで初めての壮大な展示がありました。「保元の乱」で平清盛に敗れ、讃岐に流され死去した崇徳天皇を祭神とする金刀比羅神社の参道いっぱいひな様達、海の守り神としては、造られた二m位の舟に乗ったひな様達、圧巻でした。

飾り付けは、ボーイスカウト・ガールスカウトの皆さん、情報センターに来ていた子供さん達の協力があったそうです。崇徳天皇の霊を慰め、歴

史の里で平氏のまちである「石岡」の災厄を避けると共に、安心・安全・平和を祈願し、まちが活性化し発展することの願いが込められていました。

もうひとつ新しい企画で雛めぐりと歴史めぐりがドッキング、これは情報センター主催のルネッサンスの講師長谷川功先生による歴史とお雛さまの案内でした。この企画には勉強させて頂く為にも長谷川先生のお手伝いをさせて頂き、大木や遺跡からのパワーを頂いたり、おにぎりをほおぼりながら、和菓子店の美味しい饅頭をほおぼりながら、酒の試飲をしながら、ひな様との出会い、期間中、いずれも日曜日三日間で二十人余りの参加の皆さんと楽しく、面白く、美味しく、笑みのひな様の癒しをいただきましたながら、歴史の里いしおかを満喫できました事に、参加店の皆さん、まちかど情報センターの皆さん、石岡商工会議所の皆さん、その他ご尽力くださいました方々に感謝申し上げます。来年も歴史の里いしおか、ならでは雛めぐりで多くの皆さんの来市を心待ちしています。

・春嵐 ひれ伏す水仙二人 ちさこ

剣豪・塚原ト伝

小林幸枝

常陸国一之宮鹿島神宮と鹿嶋市ゆかりの剣豪、塚原ト伝を巡るウォーキングツアーに参加してきました。テレビで、戦国時代の剣豪「塚原ト伝」というのをやっていて、塚原ト伝ってどこの人かと思っていたら鹿島神宮の関係者だということで大変びっくりした。

塚原ト伝は、鹿島神宮の祠官、ト部寛賢（吉川寛賢）の二男に生まれ、その後、塚原城の塚原安幹（つかはらやすもと）の養子となりました。

実の父親である寛賢（あきたか）から鹿島古流を学び、義父の安幹から天真正伝香取神道流を学んだ。また松本政信より新陰流を学び、奥義「一の太刀」を完成させたのだとされています。

ト伝には沢山の逸話がありますが、特に有名な話しは、訓話としてよく使われる「無手勝流」があります。試合を挑んできた若き剣豪を島に置いてけぼりにして帰ってきて「これが無手勝流だ」と言ったという話です。また宮本武蔵との勝負で、食事中のト伝に武蔵が撃ち込んだところ、その太刀を鍋蓋で受けたという逸話も有名です。しかし、宮本武蔵との話は、武蔵が生れたのはト伝が亡くなった後なので全くの夢伝説です。

ト伝は剣聖とうたわれ、没後、その剣技は吉川家に伝えられ、「鹿島新当流」として茨城県の無形文化財に指定されています。

塚原ト伝の銅像は、JR鹿島神宮駅前の神宮坂途中の公園にあります。

また塚原ト伝の墓は、須賀の梅香寺にありましたが、その寺は焼失し、今は墓だけが残されています。

歩崎の観音様

木村 進

参議院選挙も終わり世間ではようやく少し落ち着きを取り戻しているようですが、年々ひどくなる異常気象が日本列島を襲っています。

今年は神社などでも特異な年に当たり出雲大社では60年振りの大遷宮が行われ、伊勢神宮も式年遷宮の年で20年に一度の行事が行われました。さて、江戸時代の後期での日本の寿命は男女とも20歳代との統計もありますが、生まれてすぐになくなる子供の割合が比較的高く、これを除くと男女とも60歳を少し超える程度であったといえます。60年に一度の大遷宮と言うことになれば人生で一度しか遭遇できないわけで、実施する側においても経験者はわずかしいかないこととなる。これに比べ式年遷宮と言うことは人生に数回の経験を得られ、前回行った時の関係者が必ず残っており、これらの行事を忘れずに引き継いでいくのにはギリギリの間隔と考えられる。

千葉県銚子近辺の三社（雷神社・東大社・豊玉姫神社）で行われる式年銚子大神幸祭なども海の安全を祈願して20年に一度の祭りを現在も行っている。

そんな中で33年に一度、寺の秘仏を公開するところが少なからず存在する。これは主に観音菩薩像であり、ご本尊が三十三身して衆生を救うという「観音経」の教えに因んで行われていると言われている。こうなると一生のうちに一度、運が良ければ二度その仏像を拝見出来るのがやっとなことになる。

この近辺では、かすみがうら市の旧出島地区の先端にある歩崎観音でも御本尊の十一面観音像が33年に一度の開帳が踏襲されてきた。しかし、昨年（2016年）から「あゆみ祭り」の開催期間（毎年8月16日）に合わせてこの秘仏の公開が行われるようになりました。私も昨年この話を聞いてさっそく見に行ってきました。

お祭りは市民のお祭りとして子供連れなどでも楽しめる各種イベントがたくさん用意されているのですが、この歩崎観音を訪れる人はまだ少なく、ゆつくり鑑賞することができました。とても素晴らしい十一面観音像で、京都・奈良にある有名な観音像と比べても遜色ないとても素晴らしいお姿でした。大きさは高さが1mくらいの像ですが、「左手には蓮華を生けた花瓶を持ち、右手には大錫杖を持ったいわゆる真言宗豊山派の長谷寺式の十一面観音です。」

この像は行基菩薩が彫った像を旅の僧がこの地に堂宇を建てて安置したといわれています。まだ知らない方も多いようですが、今年の御開帳も間もなく行われますので機会があればぜひ立ち寄っていただきたいと思います。

実は、この歩崎観音にはこの観音像とは別に「黄金の機織り機」が保管されていてこれも33年に一度しか公開されてこなかったのです。

しかし、この機織り機は昔に東京に持ちだされ、今どこにあるか不明になっているというのです。

この歩崎観音に伝わるこの黄金の機織り機には次のような童女伝説が残されています。

「1182〜3年頃、童女がお産に苦しんでおりました。その時この観音様に願掛けします。

「このお産が無事にできれば黄金で機織り機を造って奉納いたします。どうか無事に子供が生まれますように！」と。

願い通り安産となった童女は約束通り、金の機織り機を奉納したといわれています」

さて、この話は何処から来たものでしょうか。童女伝説は法華経などと密接にかかわっているとも考えられ、民間伝承として調べてみると何か

かるかもしれません。

また、これとは別に石岡の三村地区にある「正月平」に伝わる話が残されています。源義家（八幡太郎）と父の頼義親子が前九年の役で、奥州に向かう途中でこの正月平の部落で正月を迎え、住民から温かいもてなしを受け、大いに感激し「黄金のはたし」を感謝の印として残したとされるものです。

この「黄金のはたし」は江戸時代までは正月平の地元に残されていたようですが、それをこの歩崎観音に奉納したと記されています。黄金のはたしは黄金の機織り機なのかどうかはわかりませんが、一度調べてみたいと思います。

私には本当の事が何処にあるのかということよりも時代時代でそこに生活していた人々がどのような想いをして暮らしていたのかについてとても興味を引く話だと思います。事実が分かればまた紹介する機会もあるかもしれません。

いよいよ出発

伊東弓子

地方史玉里御留川の纏めが、終りに近くなるにつれてリーダーの言葉が胸を突いた。『専門家だけの本にしたくない』という気持を、私達はどう捕らえ、考えみんなのものにしていくかと模索し始めた。みんなの手に持つてもらえるように漢字は現代漢字にし、仮名も現代仮名遣いにした。脚注は勿論、要点、要旨、要約、解説等理解し易い配慮がされ、コラム、図表、口絵、近隣からの関連資料等も加わって丁寧な仕上がった。一般の人

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

ギター文化館

2013 CONCERT SERIES

- 9月 1日 ロス・トレス・アミーゴス
- 9月 8日 里山と風の声コンサート
- 9月15日 原善伸ギターリサイタル
- 9月20日 長谷川きよしコンサート
- 10月27日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

に求め易いように値段を低く抑えたのはリーダーの考えだが、非常に残念だった。長い時間と緻密なリーダーの努力に対して申し訳ない思いだったからである。出来上がった本の紹介と江戸時代、藩が御留川と川守制度が作られ、その中で生活した庶民の歴史を語ってくれた講演会で幕を閉じたのは、平成二十二年三月末だった。その後は依頼された所へ講演に行ったり、講座での取り組みをもった所へ出かけたりと御留川を取り巻く周辺の町へ行く時は協力した。

一年後、リーダーは次の仕事に取り組んでいた。文書の火を消すまいと残った会員五名で試行錯誤を積み重ねていった。教わった古文書の扱いの基本的な事を守りながら、ともすると脱線仕勝ちな線路を正していくように努めた。一向に進まないこんな状況では本を通して伝えて行く事は到底出来ない。力のない自分を責め悶悶とした日が流れていった。そんな時文化祭の実行委員会の呼びかけがあった。何か手掛かりを見つけられるかも知れないと思つて出かけた。野外で行う催し迄は責任が持てない、との返事だった。

拒否された事で頭の中には自転車御留川を一周、駅伝がいいか、マラソンはどうか、否一番一般的なのは歩きだ。何か始めようという気持ちを起こしてくれた。それでも心定まらず二十四年は案も浮かばなかった。暮れにリーダーからの電話の声と、病に倒れた夫が背中を押してくれたのだろうか、来年春実行すると決意した。

準備が始まった。五つのグループと友等四十人に呼びかける事にした。十一〜十二人程の出席だったが、発起人となつてくれた。願いは三つ、御留川を知る事で霞ヶ浦周辺の歴史を知ろう。歩く

事で健康を考えていこう。地域の人との繋がりを深めていこうを目標にした。場所代は集まった人で出していった。学芸員への報告、リーダーへの報告と資料提供の許可依頼、鈴木家への報告と玉里御留川文書よりの資料提供の許可依頼を得た。それぞれ喜んでくれて、励ましの言葉を戴いた。自信が湧いてきたのを感じた日だった。活動の題名は、江戸時代の漁場「水戸藩玉里御留川」第一回霞ヶ浦高崎湖岸を歩こうとした。チラシの図案は「玉里御留川」の口絵から使用した。カラーコピーのチラシは目立って良かったが、費用の関係上白黒コピーを使用した。一般市民の参加が目標なので下高崎地区半分は口で伝え、足で配って歩いた。日時は四月六日（金）午前中と決定した。天候に恵まれることを願っていた。一年に五回位の会を進めていきたい。歩く時間は一時間前後とする。

愈・愈四月六日当日となった。天気は上々気持ちのよい春の日となった。

講演は拡大な時間をかけて今の姿になった霞ヶ浦の歴史を教えていただき、歩き出した。

・生涯学習センター（館山城跡の一部）

玉里時代に（十八年前）文化センター、公民館、資料館、図書館を備え、村の文化の中心となり得る場所に造られた。

・館山神社館山城と深いつながりをもつ笠間稲荷に次ぐ大きな社であった。海上交通の盛んな頃の繁栄ぶりは石祠、燈籠に忍ばれる。詳しくは玉里村史、玉里村の石佛たちの中に記されている。

・ガギ坂、女郎屋の話などあった場所も、今は柿畑が続く。

・往生塚も竹が生い茂って静かにある。畑の道は館山神社へ行く通りは変わっていない。入口にあった鳥居はなかった。

・夷の森、閑居台古墳が高くそびえている。国の事業で土どめ作業がすんだばかりでコンクリートの膚が森や土手とアンバランスだ。近所の人の話では風の流れが変わったと言う。

・西の宮神社（夷神社・恵比寿神社ともよぶ）松の太木が社を囲んでいたという。古道が残っている。村史、石佛の本に詳しくある。

現在埋められて駐車場になっている所で三十年前盆踊りをしたり、カラオケをしたり地域の人達の集う場所、その後ゲートボールも行われていた。三十年前は水面に鳥居があり、七夕流しの場でもあった。六十年代は水泳ぎの場所にも使われていた。

玉里御留川の一つ。六番目にあたる。

又旧十月には漁始めの神事が行われた場所でもある。玉里御留川に詳しくある。本の表紙の絵図にも大きく描かれている。現在高崎地区で館山神社の修理を考えていこうと若い人達から話が出ています。

・水草を再生させようという計画のもとに手入れされている。人間も作ったり壊したり忙しい。深さには呪わしい話が伝えられている。

漁をする人達も気をつけている場所だという。泳いでいる人が死ぬことが多かったという。水の流れの変わる所とか。地盤が沈むので何度も堤防を修理している。堤防のない昔はもつと水の勢いが強かつたろうにと思うこわい場所となづける。

玉里御留川の一つ。七番目にあたる。

・葦や水草が茂り、魚も集まってきて鳥も沢山の仲間が寄ってきたのは四十年も昔になるか。解禁と同時に朝早くから鉄砲の音が聞えた。流れ弾でけがをしたり、死亡事故もあった。天王宮の影は薄い。

高崎八坂神社の祭りにはお浜おりをした場所だった。砂の遠浅で、学校は勿論、八郷や美野里の方からも泳ぎに来たという。魚の泳いでいる様子やたん貝（からす貝）も取るのに簡単だった。天王宮が祭られているが、枯れた松が大きくなる迄に時間がかかるだろう。すぐ脇に機じょうが湖の水を吸い上げて田畑におくっている大きな建物がある。

・権現坂古墳への坂を上る

急な傾斜の土手の草刈りをしているシルバーの人達と冗談を交わしながら歩いた。桜の花盛りだった。馬頭観音像を仰ぎながら、中止になった老人ホームの地を踏んで行く。玉里では一番大きな古墳である。

館山城の虎の口を左に見て当時の戦いを忍んだ。古民家から細い煙が出ている。江戸時代の庄屋の家を移したもので一休みしたい所だが、縁に腰かけられないということで先に進んだ。その前を右に行く古道に入る。

コスモスに着いて帰る人、持ってきた昼食に舌鼓する人、私には皆満足そうに見えた十八名という参加の平均年齢は高いが、子供あり、学生の参加ありで一才将来が見える思いもした。水辺で働いていた昔の人、堤防を歩きながらお喋りをした今日の人達、時代は違っても生活状態は違っている、故郷を大事におもう思いは同じだろうと感じるこの頃だ。歩きながら会話が弾み、人との出

合いの楽しさもやがて人を理解する力になってくれるだろう。又地域のひとと話せば知らない世界を見つける事が出来るだろう。などなど次への期待を膨らませて二回目の集いの計画にとりかかろう。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

第六章 功績の値打ち（1）

打田昇三

中国の古典に依る「一将功成り万骨枯る」という諺がある。出典は唐時代の高級役人で詩人の曹松が作った「澤国江山戦国に入る。生民何の計あつてか樵蘇（しよそ）日々（ひ）の営（い）み（み）を（を）楽しまん。君に憑（よ）つて話すこと莫（な）かれ封候（ほうこう）のこと。一将功成り万骨枯る」という詩だそうで、一人の將軍が功名を成す陰に多くの犠牲者があること（庶民の勞苦を含めて）功績が指揮官だけに帰すことを怒った言葉だと辞典にある。

そうは言っても宝鑑で高額賞金が当たった場合の親類縁者のように、芋蔓式に関連人物が増えたのでは功績を顕彰するのに時間がかかって仕様が無い。そこで組織のトップだけが榮譽を手にすることになるのであろう。問題は「功成つた」本人が枯れた万骨に感謝しているかどうかだと思う。世の中には何もしていかなくて、そのポストに居ただけと言う「立派な怪物」が多いとは思いますが：あまり聞かない諺で「曲突徙薪に恩沢なし」突を曲げて薪を徙す（きよくとつしんにおんたくなし）とつをまげてしんをとす」と言うのが有るそうで、「突」は

煙突、「薪」は焚き木：ここから「災いを未然に防ぐ」意味と「賞罰の本末を誤ること」の例えに使われるらしい。煙突を曲げて過熱を防ぐこと及び薪を火から遠ざけて火災を予防すること（防火対策を忠告した人の言は聞かずに出火させてから消火に尽力した者に感謝した）世間には、この類の「功」と「万骨」が多い。

第五章では長い歴史の中で「功有り」の立場なのに功を罪に変えて「反逆」にされたり、或いは功を無視されたり、身に覚えの無い罪を背負わされて消され、万骨化した人々の怨念を紹介した。然しながら歴史というのは、どうしてもその構造上、著名だった人物が中心に来るから全ての怨念と復讐を紹介する訳にはいかなかった。そこで少しでも「万骨救済」に役立てたいという思いから、この章では知れ渡っている物語の中でも事例の角度を変えて幾つかの出来事を紹介してみる。その中には必ずや、主題に挙げた「歴史の嘘」が含まれていて、目立たなかった万骨の活躍が陽の目を見るようになるかもしれない：と思っている。

先ずは「隗（かい）手近（てつき）な（こと）より始めよ」という諺があるから、既に第二章で述べたけれどもも反逆者とされながら一般的には極めて評判の良い一攻撃で焼かれた石岡地方での評判は良くないようであるが偏見は捨てて一平将門の事件について鎮定に関わった者、討伐された者の双方から選んだ人物に焦点を当てて、受けた待遇や世間の評判の差などを見直してみたい。それによって一つの出来事でも見方を変えたと違った答えが出てくる——という例を示すことが出来れば幸いである。

石岡に在った常陸国府が平将門の軍勢に包囲されたのは天慶二年（九三九）十一月二十一日のこと

とされている。此の時に国府内には将門が追い求める平貞盛が匿われていた。将門は貞盛の軍勢に妻子を殺されていたし、争いの原因と内容を貞盛が一方的に都に報告していたから将門は反逆者にされてしまった。その恨みがあるところへ常陸国府内で起こった事件が重なって、国府側でも将門に対して或る人物の引き渡しを求める立場にあった。つまり将門は国府に平貞盛の身柄を要求し、国府側は逆に将門に注文を出していた。無責任な単純計算ならば両方の人物を交換すれば良い訳であるが、どちらも妥協は出来ない。これは合戦しか解決の方法が無いことにはなるのだが…。

国府の最高責任者である常陸介・藤原維幾（ふじわらのこれちか＝平国香の義弟）と常陸大掾・藤原為憲（維幾の子）が将門に対して身柄引き渡しを要求したのは常陸少掾であった藤原玄明（はるあき）という人物である。「少掾」は常陸、武蔵、陸奥など十三の大国にしかなれない役職で大掾職の補佐役である。従来の多くの歴史書は、藤原玄明が不動蔵（非常用食糧庫）を破ったことからこの人物を根っからの悪人のようにしているが、私の知る限り、地元の政治家で平将門研究の第一人者とされる赤城宗徳さんと「将門の空と大地」という著書を書かれた芦原修二さんと言う方は「藤原氏の専制政治に困窮した民の救済」を目的とした抵抗運動の要素を見出されている。

「将門の空と大地」によれば常陸少掾・藤原玄明は、現在の栃木県境に近い水戸線沿線になる旧・西茨城郡北那珂村を中心とした辺りの土着豪族らしく、常陸国府に中間管理職として勤務していた。直近の上司が常陸大掾で、トップが常陸介である。この二人の上司が親子というのは同族会社に勤務

する他人の重役のようなもので何とも難しい立場である。玄明も上司と対立して梟庁を飛び出した。対立の原因は「苦しむ民衆の救済」に絡む意見の相違であつたろうか。逆らう者は懲戒免職にすれば済むのであろうが、事実上の国司父子にしてみれば部下に尊厳を傷付けられたことになるから、とても生かしては置けないのである。その人物が将門を頼り攻撃軍に加わっている。

後のことになるが、平将門が岩井の合戦で流れ矢に当たって戦死してから、藤原玄明は本拠地に引き上げ山に籠って、攻め寄せた藤原秀郷の軍勢と戦って討死したらしい。その場所と推定されるのが笠間から宇都宮に向かう県道一号线の難所・仏の山峠から県境として西南に伸びる峯（仏頂山、奈良駄峠、高峯）の南側山地である。合戦の直前に集中豪雨で山崩れが有り、やむなく下山した藤原玄明は、待ち構える藤原秀郷の陣に斬り込んで戦死したという。「前太平記」の記録では追討軍に囲まれて危うくなった藤原玄明が、側近の坂上近高という武士と二人で農夫に変装し、村の百姓の女房に派手な着物を着せ無理に厚化粧を施し素人芝居の代役のように納得できない格好をさせてから急掬えの籠で敵陣の前を取り抜けようとした。

当然ながら警備の兵に咎められると「…寄せ手の陣に居られる〇〇様の奥方様が御主人に面会したい！」と言われたのでお連れするところですよ」と誤魔化そうとした。これで通して貰えば良かったのだが、合戦の場は甘くない。警備の者が現代の無責任な役人と違って細則まで勉強していたから「此の陣が女人禁制なのは誰でも知っている筈…」と怪しんで「曲者であろう！」と大声で決めつけた。すると気の短い坂上近高が思わず「わ

れらを曲者と言うか！」と怒り、自分が農民に化けていたのを忘れて武士の言葉になったために正体がバレて捕まった話が載っている。「前太平記」そのものが調子の良すぎる本でもあり筋書きも幼稚であるから、これはお勧め出来ない話だが…。

紹介するのも気が引けるような粗末な伝説を抱える地域は既に私有地になっているけれども付近一帯はかつて藤原玄明一族の領地とされていた。其処に昔から「平将門の墓」と伝えられる墓石がある。将門には所縁の無い場所なので墓が置かれる理由が無いから藤原玄明の墓と推定されているのだとか「新編常陸国誌」の墳墓の項に「…茨城郡池龍村五大力明王堂の後の山十町ばかりに古家あり、石塔あり、平なる石にて、高さ五六尺、廣さ三四尺ばかりあり、文字落剥読むべからず…」とある。藤原玄明という人物が、従来から言われているような自分勝手の悪人であつたならば、誰も墓を造って弔うことなどはしないであろうし、万骨として枯れ果ててもその名を後世に留めることなどはなかったであろう…と思うのである。

話を天慶二年に戻して、常陸国府を守る軍勢の質はともかく数は三千人いたと伝えられる。攻める将門の兵力は千人であるから数では国府軍が勝っていた。将門軍は南から攻めて来る。国府軍は三千の兵力を地の利に優れた場所に布陣して置けば迎撃戦で勝つたと思われるのだが指揮官の常陸介・藤原維幾は官僚であり戦さを全く知らない。何の策も無いままに、拗ねた子のように国府構内に籠っていた。やがて将門が一千の兵を率いて石岡に来てみれば、敵兵は国府館に固まっている。戦国時代と違って難攻不落の城が在った訳では無く建築に良い材料を使った程度の役所であるから

防御には適さない。例えは悪いが漁師でも魚が纏まっていれば喜ぶ。将門は国府を囲み、双方の主張がマスコミに発表された。将門軍が「平貞盛引き渡し」を求め、国府側は「藤原玄明の逮捕」を要求するであろうことは誰の目にも明らかであったから新聞記者は両軍が対峙する前に原稿を書いていた。その予想どおり双方が相手の要求に応じず、実力行使が行われたのである。

双方の睨みあいというか、交渉が決裂したので一千と三千との間に合戦が始まるのだが「新編常陸国誌」には国府側に同情したのか「…将門遂に玄明と謀り、党千余人を率い、来たりて常陸の府を攻む。貞盛及び維幾の子為憲官兵を發して防戦す。将門火を国府に放ち三百余家を延焼せり。官兵戦死する者三千人…」と書いてあり、これだと一方的に攻めてきたほうが悪いことになる。

ところが基になる「将門記」には「天慶二年十一月二十一日を以て（将門が）常陸国へ涉る。国は兼ねて警護を備えて将門を相待つ。将門陳（の）べて云わく『件（くだん）の玄明らを国土に住ましめて、追捕すべからざるの牒（ちよう）申請（しんせい）を国に奉る』と。而（しかる）に承引せずして、合戦すべきの由、返事を示し送る。仍（より）て彼此合戦する程に、国の軍三千人、員（かず）の如く討ち取られたり」とある。将門軍の要求はともかく「合戦で決着しよう」と申し出たのは国府側なのだが、それにも関わらず三倍の兵力が全く役に立たずに討ち取られたことになる。

何よりも指揮官の藤原維幾が素人で合戦の何たるかを知らない。国府内に籠っていれば敵が蒸発するとも思っている。折から北西の風が吹き出した。是を見た将門軍は国府側が宣戦布告をして

きたので「それでは…」とばかりに合戦の教範どおり風を利用して町に火を放った。火は強風に乘って国府に迫って来たから三千の国府軍は慌てたけれども、指揮官がウロウロするだけで命令が出ない。中に居た別の常陸少掾（藤原玄明の一族）が将門軍に寝返ったのを機に国司以下の役人と兵士は合同朝礼をしただけで、手際よく戦死するか焼け死ぬか、管理職は率先して全面降伏をした。

平貞盛は混乱に紛れて行方を晦ました。石岡は全焼し国府に積まれていた多量の絹布は全て将門軍の兵士が搬出に協力してくれてから「お土産」として持ち帰ることになった―これが天慶の乱で石岡が焼かれた真相と思われる。郷土愛に燃える「石岡市史」は「新編常陸国誌」に協賛して「平将門軍が国府を包囲し交通を遮断、民家に火を放って国府を混乱におとし入れ国府軍を破った」と凶悪犯に襲われたような表現で書かれているが当時の合戦で火を放つのは常道なのである。

此の地方の伝説で神様のように言われている八幡太郎義家も戦闘に放火を利用している。それどころか「常総戦蹟」という本には、水戸市郊外の渡里に居た一盛長者（いちもりちようじや）が、奥州へ向かう八幡太郎義家の一行を行き帰りに接待したところ裕福を妬まれ、恩を仇で返されて家人全員を殺害された上に家屋敷を焼かれた話が載っている。「はちまんだろう」は誤りで「やばんだろう」が正しい読み方なのかも知れない。また、戦の名人と言われた源義経などは一の谷の合戦に向かう際に途中の家々を壊して街灯の代わりに火を付けて回った。節電対策だとは言えない。さらに平清盛が世に出る「保元の乱」でも「平治の乱」でも、室町時代の「応仁の乱」でも合戦には火を使った。

木曾義仲は火を牛にも利用させて（焼き肉では無いのに）合戦を勝利している。

何しろ遠くからの攻撃用武器が弓だった頃は、矢も「やーね！」と言うほど値段が高かったであろうし、敵を射倒した場合の功名を証明するため矢には自分のサインがしてある。合戦には余るほど矢を持つて行ける訳ではない。補給手段は知らないが普通の武士で一回の戦に持つて行く「矢」は二十数本が相場のようにやたらとは使えない。安上がりの手段として「火」を合戦に用いたのであり、これが一つの戦法だったのである。

ところが、石岡は約六五〇年後にも豊臣秀吉の意図を体した佐竹の軍勢に火を付けられている。この時代には鉄砲なども出回っていて、合戦の形態が古代・中世とは変わってきている。放火に頼らなくても合戦は出来た。然も石岡（府中）が攻められた原因は、大掾氏が秀吉に御挨拶をしなかった（小田原の北条氏に好意を寄せていた）と判定されただけであるから、石岡が焼かれたのは豊臣秀吉と佐竹義宣の冷酷な野心だけに依るものである。それなのに石岡市史では、秋田へ行かなかった佐竹系の住民に遠慮したのか「…大掾氏は中世の終焉の炎の中で滅亡していった…」などと文学的な表現で書いてあるが、焼かれて熱かったことに変わりは無い。平将門時代とは条件が違う。府中城攻めに佐竹軍が使った焦土作戦こそ厳しく非難されるべきことだと思ふのだが…。

平安時代中期に戻って、この頃には長年に亘り天皇の権威を悪用し勝手放題のことをしてきた藤原一族の無能ぶりが知れ渡るようになる。地方では少しずつ政府の威厳が無視され始めた。国家権力が次第に弱まり、やがて武士の時代が出現する

ことになる。その魁（さきがけ）となったのが「平将門の乱」だと言われる。一般には将門の追討に関わった武将として田原藤太（藤原）秀郷と平貞盛の名が挙げられてはいるが、これは冒頭に述べた「一将功成り」の典型的な事例である。多くの兵士は勿論のことだが、一角（ひとかど）の武将でも秀郷と貞盛に従った者はその他大勢にされてしまったのであろうか？ 先ずは将門事件で儲かった人物から言うとかのようになる。

清和源氏の始祖である源経基は都から征討軍を率いて出てきたが実際には大した役に立っていないくても正五位下・太宰少貳（だざいしょうじ）という九州防衛の重職に栄転した。この人物は未だ将門が行動を起こす前に「謀反」として都に報告したので、その軽率さを笑われたり怒られたりしたが、やがて将門が本当に暴れてくれたから御褒美に結びついた軽率な幸せ者である。

藤原秀郷は第一の功労者として従四位下に叙され武蔵守などを命じられた。格別の出世である。元々は都で何か罪を犯して下野国へ流されてきた人物らしいから、平将門が事件を起こしてくれたお蔭で世間から「囚人」と言われていたのが「看守」並みになり、さらに「功労者」として飛躍的な出世をして儲けさせて貰ったことになる。

平貞盛は先ず都に行ったらしい。時の政府が手を焼いた平将門を討った人物として、過分の恩賞を戴き正に「一将功成り」に該当した訳である。暫定的に常陸大掾に任じられて国許の領地を整理したのであろう。功績で従五位上に叙され間もなく従四位下に進み鎮守府将軍（奥羽地方軍司令官）に兼ねて陸奥守となり東北暮らしをすることになった。他の地方の国司にも任命されたのであろうか。

将門の乱から七年ほど経った天暦元年の春には鎮守府に攻めて来た賊を退治した記録がある。都では京都二条の萬里小路に住んだようである。

「今昔物語集」には「平貞盛朝臣、法師の家に於いて盗人を射取りし語（ものがたり）」が残されている。京都の下京（しもぎょう）は下層階級の人々が多かったが、其処に一人の裕福な法師が住んでいて、どういう訳か平貞盛と仲が良かった。陸奥国の勤務を終えて都に戻った貞盛は、先ず、その法師の家を訪ねた。既に日は暮れていたのだが法師の家は厳重な戸締りがされている。貞盛が門を叩くと、中からは「何方か？…今宵は固い物忌みで籠っておる故に戸は開けられぬ」と言う。

平貞盛が「只今、陸奥国より帰参致した。我が屋敷へ戻るには夜も更けるので泊めて頂こうと参上したが、如何なる物忌ぞ？」と質問したところ、“盗賊に狙われる”と占いが出たための物忌みの最中だと答える。「それならば、わざとでも武士である私を泊めるべきではないか」と言えば、法師も納得したが、陰陽師に洗脳されているから大勢は泊らせたく無い。「一人だけ」ということで家臣団は自分の屋敷へ向かわせ、貞盛だけが弓矢を持って泊めて貰うことにしたのである。

貞盛は「明朝、挨拶をする」と言つて法師にも逢わずに、台所の戸棚に在った食べ物を口にすると、その場に寝込んだ。案の定、夜更けに門の辺りに人の気配がして何かが侵入して来た。貞盛は弓矢を取り、闇に紛れて盗賊団を誘導し一人ずつ射殺した。一部の賊は逃げ去ったが傷を負わせた者を捕らえ、隠れ家を白状させて見事に全員を退治したのである。これにより法師は救われた。この話から藤原一族が支配する世代での武士階層

の地位の低さが分かる。平将門を討ち「天慶の乱」を平定させて、言わば国難を打開して英雄扱いをされた平貞盛が勲功により陸奥国守に任命された。その任務を無事に終り、都に戻って来ても夜逃げしていた爺さんが帰って来た程度の扱いしか受けられなかった。それでも「合戦」という汚れ仕事に活路を見出した源氏や平家の武士は徐々に自分たちの世界を見つけていったのである。

平将門の乱の一部始終を記録した「将門記」には「乱後の余塵」という項目があり「之を以て之を謂（い）ふに、将門は謬（あやまり）りて過分の望みを負ひて逝水（せいすい）」の涯に従ひたりと雖（い）えども、人の為（ため）に官を施せり。其の心に怨まず。何とならば“虎は以て皮を遺し、人は以て名を残す”と。憐れむべし、先ず己が身を滅ぼして後に他の名を揚ぐること」と書かれているように、網の目のように広がって権力の座に居座る藤原一族の時代に、言い方は悪いが平将門が大騒動を起こしてくれたお蔭で、それを討伐して恩賞に与つた者は、武士としての評判が上がり一躍有名人になったから就職も見つかった。

能無し公家が支配する世の中を根底から覆して武士の時代を到来させる発端を創ったのが平将門だと言われている。そう言う意味で明治の文豪・幸田露伴は「平将門は源頼朝の大恩人だ！」と称した。えげつない話になるが、後に常陸国の大豪族となった大掾一族も「父祖伝来の領地」よりは間接的には有るが「承平・天慶の乱によつて得た領地」の方が大きかったのではないか？と思う。討伐された平将門は、父親から相続した土地が平家一門では一番広かった。父親の平良将が優れた人物であつたため始祖の高望王（平高望）から多く

の不動産を譲られており、かつ平将門が「暴れ川」として知られた鬼怒川の流域を開拓して領土を広げていた為である。乱の後では全部とは言わないが、それらの領地は平貞盛のものになった筈であり、常陸平氏を相続した者に譲られた。

初めて「平」の姓を貰った高望王の子は長男の国香と次男の良兼が共に甥の将門と戦って敗死したのであるから「たいら」では無かった。石岡地方では「国香が勢力を持って大活躍をした」とする伝説が伝わっているらしいけれども、国香が常陸大掾になる前は嵯峨源氏系と推定される源護が大掾職にあり、新参者の国香は源護と縁組を重ねて（顔色を窺いつつ）常陸国に定着していったのであるから、大活躍が出来る筈が無い。

「新編常陸国誌」には「…初め前常陸大掾源護の女（娼姿）あり（美人であった）。良将の子将門、之を挑みて得ず、既にして良兼是を聘す…」とある。此の記述は誤りながら、常陸国に新たに進出してきた桓武平氏が先輩である源護一族に頭を抑えられていたことは推測できる。そもそも平将門の事件は国香が甥を懐柔する手段として「源護の娘を将門の妻に」と勧めたのに対して政略結婚を否定する将門が「ノー」と言ったことから起こったのではないかと推定している。その娘が美人だったのか或いは「それなり」の容姿だったのかは記録が無いけれども…。

一般的な歴史書では桓武平氏の略系図として葛原親王から高見王―高望王（平高望）―平国香…と続き、後は貞盛―維衡から平家物語に至る系統が重点に書かれている。これは平清盛が予想外の出世をしたからであり、桓武平氏は東国を中心にして網の目のように広がっているのに、平家物語の

流れ以外は余り知られていない。例を挙げれば国香の弟・平（村岡）良文流では土井、畠山、千葉などの諸氏が有り、末弟の良茂流では三浦、大庭、和田、佐原、梶原、長田などの各氏である。また鎌倉幕府を継いだ北条氏や、後に豊臣秀吉に滅ぼされた後北条氏も桓武平氏系を称している。

これら諸氏の主張には少し眉唾と思われる部分も有るらしく、織田信長が自分の素性を途中から平氏に直した証拠が見つかった。名族でも支流となると陽の目を見ないのも「一将功成り…」の原理で仕方が無いことなのであろう。そういう観点から見直すと、源頼朝が平家打倒の旗挙げをした際に遅かれ早かれ協力した武将たちの多くは桓武平氏の末裔を称していた。源氏だと言ったのは甲斐の武田一族と佐々木兄弟（平多源氏）ぐらいであろう。歴史家の中には平家を滅亡させたのは源氏（頼朝）では無く平氏である（平家滅亡は仲間割れ…）とする解釈もあるらしい。平清盛が強引な政治で強大な権力を握った為に大雑把に「万骨組」にされてしまった平氏末流たちは源頼朝を利用して「抵抗運動」を企てた。ところが、担ぎ出した頼朝が一筋縄ではいかない喰わせ者で平氏末流たちは完全に服従させられた。話が違ふことに気付いた北条氏がやがて、頼朝一家を消して鎌倉幕府北条氏を世に出し平氏の時代を再現する。

常陸国に根付いた桓武平氏を「全国区」に広げる切っ掛けを作ったのは平貞盛である。既に述べたように平将門追討の功績によつて諸国の国司に任命されるようになったから「平家本舗」を都に開設したのである。それ以前にも就職の關係で都に居たのだが、給料が安かったから借家か下宿であったと思う。貞盛には十四、五人の子が居たが

十名程は勢力拡大の為に集めた養子である。実子としては維叙（これのぶ）上野介、陸奥守、常陸介、維将（これまさ）常陸介、北条氏の祖、紫式部の伯母を妻としている）、維敏（これとし）陸奥守、上野介、常陸介、維衡（これひら）伊勢守、陸奥守、常陸介など、平清盛に続く系統）の四人が各書ばらばらに記録されている。

四人の中では末弟の維衡（これひら）が一番に知られている。維衡は出羽守、伊豆守、下野守、上野介などを歴任してから伊勢国に目を付けて、権力者の藤原道長に睨まれながら徐々に開拓を進め伊勢平氏の基礎を築いた。貞盛の養子では代表的なのが第四章で触れた「余五（十五番目の子）將軍・平維茂」である。日本外史の平氏系図には伊勢平氏・維衡の系列（平家の主流）と並んで、木曾義仲と戦った北陸の城一族に繋がる維茂の系統を挙げている。維茂は、貞盛の弟・繁盛の子とされるが、繁盛の子・兼忠の子とする説もある。

その平繁盛は戦国時代に府中城で滅んだ大掾氏の血系上の祖先なのであるが、どういう訳か石岡では平国香を始祖にしたがり、繁ちゃんの「し」の字も言う声が無い。幾筋かに分かれて脈々と続く家系の始まりを誰にするかは異論の出る所であろうけれども、やはりその始点で大きな功績や影

《ふり》

アソビの書・書友会館料理のお店です。

（ミナト文化館通り）

看板娘（犬）「うら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

電話0260-470-6000

響があった人物が選ばれるべきで甥の将門と喧嘩をして敗れただけの平国香よりも、桓武平氏全体ならば高望王こと平高望が、伊勢国に展開した平氏ならば平貞盛が、そして故国常陸国に残った大掾氏では平繁盛が始祖と呼ばれるべきである。

「日本家系図大事典」には平繁盛から二つに分かれて維幹を大掾氏の祖とし、余五將軍こと維茂を岩城氏の祖にしている。次のような注釈が付いている――平高望が東国へ下向して坂東平氏となり貞盛系は伊勢国に下りて伊勢平氏になる。清盛の代に六波羅に政權を樹立したが他の平氏は全て公家となった――記録の少ない平繁盛は、兄の貞盛と同じく京都から来て兄の軍勢に従ったのか或いは常陸国に居て兄に協力したのか不明な点が多い。通俗書「前太平記」には「平将門が謀反を起こす相談を従兄弟の平兼任（国香の三男）にしたので困った兼任は土浦城に居た国香に知らせ、国香は繁盛に命じて石岡から藤代までの軍勢を集めて将門軍と戦わせた。藤代川の決戦で国香は重傷を負い土浦城に退いて死亡した」というような物語が書いてあるけれども「将門記」などの記述に全く合わないから「立派な嘘」と言うしか無いけれども、これに「平繁盛」の名が十数か所も出ているのは貴重であり、少なくとも繁盛は地元に住たものと推定出来る。貞盛が来てからは指揮下に入って戦ったのであろう。一般的に考えても嫡男である貞盛が都に出てしまったので国香の居る地元には繁盛が残っていたと考えるべきで、先に述べた赤城宗徳さんの著「平将門」でも都から駆け付けた平貞盛が「…人づてによつて、ようやく弟繁盛等を尋ね出し…」と書いてある。

「将門記」には触れられていなくても平繁盛に

は兄の貞盛を補佐する立場で平将門と合戦をした功績があったことは明らかなのだが「万骨の法則」から、兄の手柄は認められても、弟の繁盛は恩賞に洩れて名前さえも記録されていない歴史書が多い――その替わり繁盛には筑波山の南部及び西部に在った広大な領地が譲られた……と思っていたのだが、どうも、そうでは無いらしいのである。平貞盛は領地を弟の繁盛に譲ったのでは無くて、繁盛の子の維幹を養子にして不動産を相続させたようである。そうすると、余計なことだが平繁盛という人物の立場はどうなるのであろうか……。

桓武平氏系図などには平繁盛も陸奥守に任官して正五位に叙され武蔵権守に補されたように記録されているらしい。兄の貞盛が養子にして余五將軍と呼ばれた繁盛の息子（維茂）は、陸奥国で領土争いをしている。或いは平繁盛からも陸奥守時代に現地で勢力を伸ばしていたのであろうか。この人のことに触れた記録は極めて少ないけれども息子の維茂が「今昔物語集」などに登場する。繁盛も万骨に恨まれない程度の恩賞は受けたと思われるのだが……そして別な息子の維幹がこれも貞盛の養子となって常陸国内の領地を相続し、常陸大掾職を世襲して大掾氏と呼ばれる豪族になったのであるから言うことはない筈である。

ところが、それら平繁盛の処遇？を否定するような事件が寛和二年（九八六）にあったという。この年は第五章で述べたように花山天皇が藤原一家に騙されて退位に追い込まれた年であるがそれとは関係がない。話の状況から推測すると、常陸国内に居たと思われる平繁盛が純金を溶かして書いた「大般若経」六百巻を比叡山に奉納する……と記者会見で発表したらしい。これがマスコミで大騒

ぎになった。般若経は紙に書いたものであるが「純金入り」となれば高級品で、話が変わってくる。なぜ、そういうことをしたのであろうか……。（続く）

【風の談話室】

異常気象という言葉でくくってしまうえば何でも無条件に納得しなければならない様な気分にはせられてしまつ。未だに濫用されている「想定外」の言葉と似ている。

大騒ぎにもならなかった白けた参議院選挙も終わった。素晴らしい投票率であった。

しかし、こんな事も全て異常気象の言葉にまとめてしまえば「フープロブレム」。

だが本当か？

一生懸命考えてあぐさく動こうと、何も考えずジツとしていようと思つた時は同じで、誰にも平等である。

「問題ない」という言葉は移ろう時から見た言葉なのだろう。今に生きる我々には問題だらけなのだから……。

【ヨイシヨ広場】（陸平をヨイシヨする会）

人生の岐路

田島早苗

生きることを問い直す日々の明け暮れの中へ、知人の訃報が続いて届き、人生についてしみじみ

考える縁になった。

六十三才で逝ったヨイシヨする会の仲間は、心臓の持病を抱えながら大好きな考古学を独学で学び、発掘作業に、土器作りにと情熱的に取り組み、数多くの素晴らしい複製土器を残された。お酒が好きだったのが災いして最後は持病の心臓病ではなく脳溢血で、誰に看取られることもなく急逝されたという。七月二十六日から文化財センターで土器部会主催の遺作展が開かれ、改めて惜しい人を亡くしたとの思いを強くしている。

九十九才で亡くなられた知人の姑の人生も、自分を貫いた見事な生き様だった。ゼロから始まった二人三脚の商売は並大抵の苦労ではなかったが一応軌道に乗り、三人の子供を立派に育て上げ、夫の看取りもすませた後は、したい放題、言いたい放題「自分の財産は生きてる中に全部使い切る」の言葉通り、九十才を過ぎてても若い仲間とカラオケや、飲み会、旅行を楽しみ、お金をすべて使い切り、家族に看取られながら九十九才の安らかな終焉を迎えられたという。アイバンクに登録してあったので「両眼を目の不自由なひとのお役に立たせて頂きました」という感謝状の贈呈式に立ち会いながら、高齢者でもお役に立てるのだと、爽やかな感動の別れだった。

人は誰もが老いを逃れることは出来ない。でも、衰えた筋肉でも鍛えれば若さが甦るらしい。九十九才で背泳の世界記録を十六個も持っている長岡三重子さんの場合も、八十才の時、ひざの関節が痛く正座も出来ず趣味の能舞を続けるのも困難になってしまった。その時息子さんの勧めで水泳を始めたのがきっかけという。最初は少し泳いだだけですぐ疲れてしまったが、背泳に切り替えてか

ら記録が伸びるようになり、膝の痛みも嘘のように消えたという。

「来年百才になってもまだまだ泳げるように頑張りたい」

と語り、今も毎日泳ぎ続けている若々しい三重子さんは、全女性の夢と希望の星かも知れない。(運動音痴の私には無理)

人それぞれの人生の中で誰もが巡り会う数多くの岐路を、前向きに受け止めて挑戦続ければ、その人の前には新しい世界が開ける。若い人達に老いて後悔しないような生き方をして欲しいが、自分の若い頃を振り返っても、その頃は生きていくことに精一杯でゆとりがなかった。今になって思い当たる人生の岐路を選び直せるはずもなく、最善の人生だったと思うように、今少し頑張ってみよう。

夏休みに入って文化財センターの体験講座に集まる親子連れを見てみると様々な人生が見え隠れして楽しい。たとえ一期一会の触れ合いでも、子供達の心に何か残せないかと老いの冷や水の奮闘は続いている。

この風の談話室の「ナー」に時々菅原茂美兄の「コーヒーレイク」を入れて頂いていたが、今月から少し趣向を変えて「一寸一言、もう一言」の「ナー」を設けてみようと思っている。

菅原兄には、もつと大声で吠えてください、と毎回話してきたのであるが、長文に大声で吠えるのは些が疲れてしまう。

それで、小声に小さく吠えることも必要なので、編者の独断でちよつと「一寸一言」もつ「一寸一言」を新しく作る事にしてみた。

【一寸一言、もう一言】

『情緒法』が憲法より上

菅原茂美

新聞報道によると、お隣の韓国社会には、国民感情として存在する「情緒」の方が、憲法の上にはないが、マスコミなどが後押しすると勢いを増し、司法が明確に情緒を支持する。実際、「財閥」といわれる大企業に厳しい判決が下り、路地裏の屋台など違法営業は黙認されたりするという。

しかし、こういう問題は、国内だけならむしろ微笑ましいが、他国にも及ぶとなると、簡単には見過ごされなくなる。例えば、靖国神社の神門に放火後ソウルの日本大使館に火炎瓶を投げ込んだ中国人を「日韓犯罪人引渡条約」に基づき、日本が身柄引き渡しを要求したら、ソウル高裁は「不可」と判決を下した。中国はそれをいいことに、中国送還を進めているという。

又、元従軍慰安婦の賠償請求権は、1965年締結の協定で、個人の請求権は「完全かつ最終的に解決された」と明記されているが、ソウル高裁は「消滅していない」と判断を下す。それどころか、韓国政府は慰安婦問題解決に努力しないのは憲法違反に当たるとさえ判断を示した。この判決を得て、当初、好意的だった李明博元大統領は、慰安婦問題の対日交渉を持ち出し、決裂すると「竹島上陸」という最悪事態をひき起こす結果となった。

日常の中で「俺」も「ちよつと」も「一寸一言」と「もう一言」という場面が多々あるものである。

一寸待て、俺にも…、と言えろ場があるのは精神衛生上非常に重要であると思う。

2000～3000字程度の「ちよつと一言」の投稿を事務局の方に頂けたら、と思っております。

【ことば座だより】

心の贅沢とお洒落

白井啓治

先日、友人のフェイスブックに於いて「芸術とは心の贅沢のことを言う」というメッセージを送った。それでという訳ではないが、芸術について一寸考えてみたいと思う。

芸術を国語辞典などに調べてみると、技芸の学術と出ていたりするが、これでは芸術とは何かかさっぱりわからない。そして、芸術は分類すると造形芸術、表情芸術、音響芸術、言語芸術、空間芸術となる、ともでている。芸術とは何かを論じようとすると実にややこしい事になり、芸術なんて嫌いだ、ということにもなりかねない。

芸術は爆発だ、と言った人もいる。実際、芸術には爆発と評しても良いほど、現状を破壊する力を持っている。分野を問わず新人の創作者・創造者には、現状の既成を打ち破る力を期待されるものである。

ここに芸術論を展開させるつもりはなく、もう少し平ったく芸術とは何かを身近に感じてみたいと思う。

芸術、その中身を短絡と言われても気にせず一言にいうと、「美の表現」という事になるだろう。表現手段の区分は別にして、美を表現するのが芸

術と言えよう。そして、美の本質は「心の贅沢とお洒落」だと言える。

戦時中、贅沢は敵だと言われたことに対して「贅沢は素敵だ」と言い替えた人がいた。素敵は素の当て字であるが、敢えて当て字にしたことがお洒落になっている。

芸術とは心の美を表現する事であり、心の美は精神的な贅沢とお洒落によつてのみ磨かれ、具現化出来るものだといえる。いかなるときにも心の美を失わないでいる事は実に変なことであり、相当にストイックで強靱な精神を持つていないと維持し続けることは難しい。その為に多くの芸術家と呼ばれる人には変人と思われてしまう側面があると言える。しかしそれは横並びをしないということにすぎないのだが、横並びにしか物事を見られない人には、矢張り変人と映るのだろう。

演劇は映画と並び総合芸術と言われており、我等がことば座も小さいながらも総合芸術集団と言える。芸術集団なのだから、心を一生懸命に贅沢させてお洒落にしておかなければならない。ふるりの文化としての表現を横並びに見たり考えたりしないで、唯ひたすらに心の贅沢とお洒落を目差して進みたいものである。

芸術とは心の贅沢、心のお洒落と自覚して…。

早すぎる梅雨明けが来て、次には長すぎる戻り梅雨があり、再び猛暑がやって来た。こんなにも目まぐるしく陽気変動すれば、年寄でなくても体調を崩してしまう。

恨み言を言つてないで、柔軟に気象に対応出来る感覚を養い、体力を養つ以外にないだろう。

ギター文化館 2013 コンサートシリーズ

第5回「里山と風の声」コンサート

9月8日(日)14:30 開場 15:00 開演

橋爪恵一パフォーミング・アーツ

クラリネットの奏でる風に乗って里山の木々が声する
(クラリネット：橋爪恵一 ピアノ：武石玲子)

里山の風に詠う

里山に風が流れるとき言葉がうまれ詩が生れる。朗読：白井啓治

※コンサート料金 3500 円（事前購入 3000 円）小中学生 2000 円

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

Tel0299-46-2475 fax0299-46-2628

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

Tel 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>